平成30年度

壱岐島医療福祉研究発表会

プログラム・抄録集

平成31年3月3日（日曜日）

9：30～12：00

壱岐の島ホール（中ホール）

壱岐医師会・在宅医療推進部

H30年度

壱岐島医療福祉研究発表会
プログラム・抄録集

日時　平成31年３月３日（日曜日）　9：30～12：00（受付開始9：00～）
場所　壱岐の島ホール（中ホール）
司会　医療法人（社団）協生会　品川病院　寺尾　あかり
挨拶　在宅医療推進部会　会長　光武　新人　9:30~

演題　Ⅰ　（発表６分/質疑４分/1人）

【座長】　壱岐病院　地域包括健康増進センター　看護師長　吉田　香　9:35
内科急性期病棟　看護師長　末永　美幸

【１】壱岐島骨粗鬆症リエゾンサービスの有効性検証と今後の課題　9:35~45
医療法人（社団）協生会　品川病院　整形外科
栄養科　科長　管理栄養士　長岡　加奈

【2】がんリハがもたらしたがん患者の生活機能変化と入院満足度　9:45～55
社会医療法人　玄州会　光武内科循環器科病院
がんリハビリテーションチーム　松田　武史

【3】緑内障患者への点眼治療継続のための取り組み　9:55~10:05
医療法人　清光会　山内眼科医院
視能訓練士　岩佐　侑哉

【4】意思決定支援　～私たちは伝えたい～　10:05~15
社会福祉法人　和光会　障害者支援施設　希望の丘
サービス管理責任者　品川　直毅　支援部主任　竹藤　鋭郎

【５】介護学生の実習受け入れからみえてきたもの　10:15~25
医療法人（社団）協生会　介護老人保健施設　壱岐
入所部介護主任　介護福祉士　山本　学

休憩　交流会　コーヒーブレイク　10:25~55

演題　Ⅱ

【座長】社会医療法人玄州会　光武内科循環器科病院　外来師長　横山　純子　10:55～
一般病棟師長　長島　有美

【１】オムツ交換回数の削減に取り組んで　10:55~11:05
長崎県壱岐病院　4階療養病棟
看護補助者　石橋　和子

【2】入居者体験を通して入居者の気持ちを知る　11:05~15
社会福祉法人博愛会　特別養護老人ホーム　ハッピーヒルズ（幸せの丘）
介護福祉士　松本　章吾　濱田　祐也

【3】ひとりひとりの思いに答える・・・デートプラン♡　11:15~25
（有）弦観光　グループホーム　壱岐の郷
介護士　永安　要平

【4】療養病棟における身体拘束ゼロへの試み　11:25~35
社会医療法人　玄州会　光武内科循環器科病院
介護課　介護福祉士　中上　昌弘

【5】自分らしく生きそして旅立つ　～本人の意思を尊重した看取りケア～　11:35~45
社会福祉法人　光風会　特別養護老人ホーム　光の苑
看護師　前田　あゆみ

総評　壱岐医師会長　江田　邦夫　11:45~50

研究テーマ：壱岐島骨粗鬆症リエゾンサービスの有効性検証と今後の課題

所属施設名：医療法人社団協生会　品川病院　整形外科

研究者名：○長岡加奈、大石聡、松本真由美、石本誠

【はじめに】骨粗鬆症は、椎体、前腕骨、大腿骨近位部などの骨折が生じやすく、その対策が医療のみならず社会的にも重要な課題となっている。それに伴い、他職種連携による骨粗鬆症への診療支援が重要視されている。すでに英国等では先進的に実施されており、多職種連携による骨折抑制を推進するコーディネーターの活動によって、骨折発生率が低下し、トータルでは医療費も少なくて済むことが報告されている。当院でも、多職種が連携し、骨粗鬆症の診療支援を行なっており、10 年が経過したため、その有効性を検証することとした。

【概略】壱岐市では、骨折手術を行うのは長崎県壱岐病院のみであり、当院では保存的治療を行っている。2007 年 4 月から病病連携を開始し、当院では主に脊椎椎体骨折に対する骨折リエゾンサービスを開始した。当院における患者管理・治療継続目的にて骨粗鬆症カルテ作成。半年毎に継続的に骨密度測定実施。薬剤は長期製剤・注射製剤を使用。運動療法の継続。啓発として、患者と骨粗鬆症マネージャーとの接点を増やし、院外でもマネージャーによる出張講話を繰り返す。院外活動としては、昨年度、壱岐島リエゾンネットワーク結成。市及び医師会後援イベント・講演会を実施している。

【方法】有効性検証は以下の 3 項目で行った。1）治療継続率（当院）。理由は問わず、通院中止を脱落とした。2）治療率（壱岐市）。年間の島内の各薬剤出荷額から治療者数を算出し、推定骨粗鬆症患者数（60 歳以上人口の 1／3）で除して求めた。3）大腿骨近位端骨折発生率（年間手術数　壱岐病院）。2008 年→2017 年。60 歳以上および 80 歳以上の人口で除して算出した。なお、同期間における壱岐市の人口増減率は、総人口 0.87 倍と減少、60 歳以上は 1.01 倍と変わらず、80 歳以上は 1.20 倍に増加した。総世帯数は 1.00 倍で増減なし。

【結果】1）新規治療開始患者の 1 年以上継続率は 2009 年（1／1～12／31）：71.2%（42／59 人）→　2016 年：72.1%（31／43 人）。同 2 年以上継続率は 2009 年：63.9%→2015 年：65.9%。うち、70 歳代の 2 年継続率は 65.8%であるのに対し 80 歳代は 49.5%であった。

2）34.24%（2017 年）。1356.9 人／11888／3＝

3）60 歳以上人口比では 0.35%（41 例／11731 人）→0.62%（74 例／11888 人）と 1.78 倍に悪化した。80 歳以上人口比でも 1.30%（／3166 人）→1.96%（／3784 人）と 1.51 倍に悪化した。

【考察】当院における治療継続率は明らかな増加傾向は示さなかった。壱岐市全体の治療率は他地域に比べて若干高水準ではある。が、共に欧米の実績には程遠い。大腿骨近位部骨折の発生率は未だ増加傾向である。人口統計からは、”高齢者の高齢化　及び　高齢者のみの世帯の増加”が進行している。それ故の通院困難者は増加し、自立生活困難者の転倒骨折は増加しているものと推察される。今後の骨粗鬆症リエゾンサービスは介護分野および行政との連携がより重要度を増すものと思われる。

【倫理的配慮・説明と同意】本研究にかかわるすべての研究者は「ヘルシンキ宣言」および「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を遵守して実施した。

研究テーマ：がんリハがもたらしたがん患者の生活機能変化と入院満足度

所属施設名：光武内科循環器科病院　がんリハビリテーションチーム

研究者：松田　武史

【目的】がん患者におけるリハビリテーションは、身体機能の回復力を高め、残存機能を維持・向上させることが確定されている。
そこでこれらの身体的・精神的改善の定量化を試みた。

【方法】1)　対象者　ターミナルの入院患者(H30/4～H30/12)
2)　方法　本人のリクエストに合わせたリハビリを施行。身体面の評価としてBarthel Index(BI)とKarnofsky Performance Scale(KPS)を使用。精神面の評価についてはアンケートを実施。改善率を平均値と標準偏差で表す。

【結果】1)　対象17名(男性5名・女性12名)
年齢:63歳～92歳(平均81.9±8.86歳)
2)　実施期間:2日～147日(平均35±36日)
3)　身体機能変化
BI:3±21.25%、KPS:2±19.06%
4)　精神機能変化
総合満足度:33±29%

【結論】・患者様の症状・状態により改善または悪化がみられた。
・年齢や実施日数が短いことで、身体機能変化に大きな改善は得られなかった。
・精神機能変化は平均33%の改善が図れた。

研究テーマ：緑内障患者への点眼治療継続のための取り組み
所属施設名：医療法人　清光会　山内眼科医院
研究者名　：視能訓練士　岩佐　侑哉

【はじめに】

緑内障とは、目に入ってきた情報を脳に伝達する視神経という器官に障害が起こり、視野（見える範囲）が欠損していく病気のことである。

緑内障による視神経障害は、眼球の内圧である眼圧が、各個人の耐えられる眼圧以上に上昇することによって視神経が圧迫され、緩徐に引き起こされる。

欠損した視野は、回復しないため、治療で最も重要なことは、何よりもまず眼圧を下げ、これ以上視神経が障害されないようにすることである。

【点眼薬治療】

緑内障の治療は、まず点眼薬を中心とする薬物療法が行われる。しかし継続的な点眼治療が必要な疾患でありながら、患者によっては、緑内障に対する理解が低い、自覚症状が少ない、点眼を継続的にすることが面倒、治療効果が実感できない、点眼薬のさし心地が悪い等の理由から自己中断する事例が少なくない。

当院では緑内障患者に対して、患者に点眼治療を継続してもらうために 3 つの取り組みを行っている。

【取り組み】

① 点眼残薬の確認

コンプライアンスの乏しい患者への点眼薬の残存本数確認と点眼指導

② 緑内障手帳の配布

定期受診毎に緑内障手帳への眼圧の記録

③ アクトパック（初めて緑内障と診断された患者への説明資料と方法）

医師からの緑内障の説明、点眼指導、動画の視聴、緑内障パンフレットの配布

理解力の乏しい患者へは家族と一緒に来院。家族を含め説明。

【結果】

平成 29 年よりアクトパックを使用した緑内障患者 11 名は、現在も点眼治療を自己中断せずに継続受診できている。

【課題】

視野が狭くなり、歩行も介助が必要な患者にとって、毎月の受診は困難である。

しかし点眼治療は欠かせない。往診で対応している患者もいるが、緑内障患者が入院・入所した場合は、家族または施設スタッフから連絡がないと往診できない。

受診困難な患者自身が緑内障についてどれほど理解しているか、点眼は継続できているのか把握するには限界がある。患者の家族や施設スタッフの方にも緑内障について理解してもらうことが必要だと考える。

【研究テーマ】　意思決定支援　～私たちは伝えたい～

所属施設名：障害者支援施設　希望の丘

研究者名：品川直毅　竹藤鋭郎　（江川洋平　桝崎望）

【目的】
自ら意思を決定することに困難を抱える障害者が、可能な限り意思決定ができるように、平成29年4月開設から2カ月後の平成29年6月希望の丘入所利用者で構成される、たんぽぽの会を発足する。利用者同士、共に生活していく仲間として、自立、仲間意識、率先性、責任感、自ら発表する場を提供し、可能な限り意思決定ができるよう職員を含め協議を行い、安心して生活ができるように様々な活動を行うことを目的とする。

【方法】
平成29年6月　たんぽぽの会発足
開催頻度　月に1～2回
利用者の意思決定ができる場の提供、基本的に利用者主体で意見を出したり進行を行い、会が円滑に進まない場合は職員がサポートを行った。参加利用者はテーマを元に参加していただく。また障害の特性上参加が困難な利用者には事前に議題を提示し、意思確認を行った。また、ある利用者の何気ない一言をテーマの議題とし協議を行ったケースもあった。

【ケース紹介】
A氏女性（ADLほぼ自立、精神発達遅滞、知的A2、癲癇、胃潰瘍）
施設生活において自分なりのペースや価値観を重視した生活を好むため、本人のペースや価値観を見極めながら、気分変動の特性を理解しつつ生活支援を行っている。自分の思い通りにならない時には突発的に施設屋外へでられることや他利用者への暴言、物を投げるなどの行為があり、本人の言動の傾聴を行っている。食前臥床傾向にあり食事の際は声掛けを行っていた。臥床中の食事の声掛けに拒否反応を示されることがあり、食事時間に遅れてくることや、居室にて一人で食事を摂りたがることもあり、不穏となる傾向にあった。A氏より放送で知らせてほしいと要望を受け検討することをお伝えする。たんぽぽの会のテーマの議題とし協議することを説明し、会への参加を促した。

【結果】
会への参加、A氏の要望、意思決定できる場を提供し利用者、職員のサポートのもと食前の館内放送を行うことを決定する運びとなる。参加利用者もA氏の要望に賛同され、現在では食前の放送を利用者主体で行っている。放送開始にあたり、それぞれの障害の特性上、他利用者の混乱や不穏等も懸念されたが、大きな混乱や不穏等に至ることはなく、A氏の食事時間に遅れてくることや、不穏となることが軽減された。また、A氏の一言から施設の日課に沿って利用者が自主的に行動することができるようになった。

【考察・結論】
たんぽぽの会を開催するにあたり、利用者の意思決定の場を提供、可能な限り利用者の意見を取り入れ、現在ではA氏を中心に給食当番などのそれぞれに役割を持っていただき、自主的に行動することが可能になった。やりがいを持っていただくことで、不穏症状が緩和され安定した時間を過ごせるようになった。

研究テーマ：介護学生の実習受け入れからみえてきたもの

所属施設名：介護老人保健施設　壱岐（入所部・通所部）

研究者：　（発表者）山本　学（入所部介護主任　介護福祉士）

【目的】２０１７年４月、『こころ医療福祉専門学校壱岐校』が開校し、当施設でも介護学生の実習受け入れが始まった。『介護実習』は学生の知識・技術向上を含め、基本的・応用的スキルアップのための効果的手段である反面、実習指導施設の介護職員にとっても、同様の効果が期待される機会であると考える。そこで実習受け入れに対して介護職員がどのように考えているか調査し、今後の業務や実習の質の向上につなげる。

【方法】方法：記述式アンケート調査
対象：入所部・通所部　（介護福祉士・介護職員）
アンケート項目：①介護学生への指導の有無　②困難に感じたこと
③実習生から学んだ事・感じたこと
④今後の課題

【結果】アンケートの結果、学生指導などに関わった職員からは、自分自身の知識・技術などのスキルへの不安や理解してもらえるように伝えることの難しさ、適切な説明や指導などが行なえたかなど不安感が伺えた。同時に、上記内容に対し個々のスキルアップのための再学習や業務姿勢の見直し、入職当時の思いを再確認したという回答も多くあった。

【考察】介護実習は、学生の『学習の場』でもあるが、同時に指導者職員にとっても自己研鑽を行なえる貴重な機会（場）になっている。今後の介護実習をより良いものにするためには、介護実習指導者をはじめ、個々の介護福祉士・介護職員が自己のスキルアップをはかり、学生の『介護福祉士』になりたいという思いをサポートできる指導環境づくりが重要であると考える。そして、個々のスキルアップが利用者へ更なるサービス向上へつながるように今後も努力していきたい。

研究テーマ：オムツ交換回数の削減に取り組んで

所属施設名：長崎県壱岐病院　　４階療養病棟

研究者名：○石橋和子　寺田幸江　長岡アケミ　西野珠実　牧山章子

【目的】療養病棟では寝たきりの患者が多く、オムツ交換に１日平均 6 時間を要している。生活リズムを整え快適な生活を提供すべく、オムツ製品の見直しと交換回数の削減を行い、患者個々のケアの充実に努める。

【方法】適切なオムツの選択と交換手技の統一を行う。排泄状況の記録。スタッフへのアンケート調査の実施。

【結果】①排泄ケアセミナーに参加したスタッフを中心にオムツの使用方法を指導し手技の統一が図れた。

②オムツ交換時間と種類を各部屋のオムツ庫内に表示した。排泄状況を記録し当て方検討などを個別に実施し漏れが少ない患者の横シーツ除去が行えた。

③オムツ交換に要する時間は 1 日約１時間３０分短縮。回数は１日４回から２回へ削減。削減したことで排尿による皮膚トラブルの発生は無かった。排便コントロールを行い皮膚トラブルの予防に努めた。

④短縮できた時間を爪切りや飲水介助・歩行訓練などの患者ケアや物品庫の整理などの業務に充てた。

⑤各部屋に受持ち看護補助者を配置し担当患者のケアの充実をはかった。

⑥アンケート結果よりスタッフの意識変化がみられた。

【結論】排泄状況の長期的な記録により患者個々に応じたオムツ交換が行われる。機能性の高いオムツを適切に使用することで患者が感じる不快感の軽減や安眠効果が期待できる。回数削減により患者ケアの充実や業務改善に繋がった。

研究テーマ：入居者体験を通して入居者の気持ちを知る

所属施設名：社会福祉法人　博愛会　特別養護老人ホーム　ハッピーヒルズ(幸せの丘)

研究者名：(発表者) 松本章吾
(共同研究者) 濱田祐也・近藤美穂子・伊佐藤修司
山川早苗・山川美佐代・山元恵太

【目的】
平成27年に開設して5年目を迎えるに当たり、ケアの内容が業務優先の流れにあった。
業務優先のケア内容を見直すため、育成委員会の取り組みとして「入居者体験」を年間計画に挙げ、支援や介護がないと生活出来ない事の辛さを学び、要介護者の痛みを知る事で人に優しく人を大切に思う事を目的に、業務優先のケアから入居者一人ひとりに合わせたケアへの改善を図った。

【方法】
①平成30年6月～8月
全職員を対象に入居者体験を実施。実施後職員は、アンケートを記入。
②平成30年9月
全体ミーティングにてアンケート結果を報告し、2ユニットごとに今後のケアに関しての明確な目標と、具体的な取り組み内容を設定する。
③平成30年12月
評価アンケートを実施し、日ごろのケアにどう変化が出たかを確認。

【まとめ】
食事や排せつケアを一斉に行う事が少なくなり、ご入居者それぞれの生活時間を軸にケアを行う職員が増えた。リビングの机に伏せたままで長時間過ごしていたご入居者も数名いたが、適宜休息時間を設ける事で活発に活動したり、表情が豊かになるなどの変化が現れた。コミュニケーションを取る際にただ声をかけるだけでなく、ご入居者が感じる孤独感や不安をいかに軽減できるかを考えながら声掛けを行う事で、ご入居者やご家族との信頼関係の構築に繋がった。また、時計や絵画を車いすの方も見える位置に変更するなど、環境面での気付きも増えた。

【課題】
入居者体験実施後に具体的な目標を設定する事で、一人ひとりに合わせたケアへ少しずつ改善できている。今後現在のケアを継続・向上させていくためにも定期的に、ご入居者一人ひとりのケア内容を共有・評価できる仕組みの構築が必要であると感じた。

研究テーマ　：ひとりひとりの思いに答える・・・デートプラン

所属施設名　：有限会社　弦観光　グループホーム　壱岐の郷

研究者名　　：介護士　　永安　要平

【目的】　施設での生活というのは、少なからず集団生活であり、一人一人のやりたいこと、今までの生きてきた生活や、習慣に答えてあげることは、難しい状況です。施設で働く職員に、気持ちはあっても、日常の業務に追われたり、職員不足で時間を長くとってあげることは難しいのが現状だと思います。そこで、グループホーム壱岐の郷では、ひとりひとりの思いに答えるために、勤務自体に、個別の対応をする勤務を作りました。

　集団生活の中でも、やりたいことをして頂く。少しでも時間を大切に生きてほしいと思っています。

【方法】個別対応のプランを、当施設では、デートプランと呼んでいます（職員と１対１なので）。その活動報告を今回は紹介したいと思います。

１，Ｔ様、家を見たい･･･と希望。

２，Ｅ様、家に帰りたい･･･。

３，Ｓ様、来来軒の酢豚が食べたい･･･

４，まだまだ進行中･･･

【結論】あらためて、１対１で時間を過ごすことの難しさが感じられました。

まず、利用者様から何がしたいかを聞き出すこと。簡単に出てくる方は良いのですが、なかなか出てこない方ばかりでした。そんな中でも、色々と提案していく職員自体のスキルアップにも、繋がっていたように思います。

まだまだ取り組み自体は、はじめたばかりですが、ご利用者様の中には、「綺麗にしてあった」と満足そうに、何日も話をされる方もいらっしゃいました。結果的に、全てが良い方向には向きませんでしたが、これからも、ご利用者様の多くの「わがまま」を引き出していき、壱岐の郷ならではの介護に取り組んでいきたいと、思っています。

研究テーマ：療養病棟における身体拘束ゼロへの試み

所属施設名：光武病院　介護課

研究者：中上昌弘　高田京子　竹下晃司　中嶋拓朗　竹原奈都美

【目的】　療養病棟にて身体拘束を受けている患者の不穏の要因・パターンを明らかにして、最終的に病棟における身体拘束を廃止する。それにより患者主体の療養生活を過ごして頂く。

【方法】1　対象　療養病棟にて身体拘束を受けている患者
2　方法　症例ごとの病状及び問題点について、カンファレンスで評価・検討を繰り返し行い実施

【結果】　症例提示

【結論】　今までは患者自身の安全のためだと諦めていたが、毎日の観察とカンファレンスで可能な限り身体拘束をゼロに近づけることが出来た。また、拘束廃止に向けての代替え方法である介護用具の導入、介護の工夫が今後の重要な課題と言える。

研究テーマ：『　自分らしく生き、そして旅立つ　』

所属施設名：特別養護老人ホーム　光の苑

研究者：看護師　前田　あゆみ

【目的】
光の苑における看取りのほとんどが認知症により意思表示ができなくなっているなかで、この事例は亡くなるその日まで自分の意思を伝えられた例であった。これまでとは違う看取りを行い、そこで気づいたことについて報告する。

【症例】
・Ａ氏、認知症、うつ病、
・車いすの生活ではあるがほとんど日常生活は自立している
・認知症は軽度でコミュニケーション能力も高く、自分の意思を伝えることができる

【経過】
・Ａ氏は、病院に行きたくない、延命治療は望まないと私たちにも家族にもおっしゃっていた。
・看取りケア開始後もＡ氏は意思表示できる状態であり、他職種のスタッフで協力し、本人の意思に沿ったケアを心がけた。
・本人の意思に沿ったケアを行うことで亡くなるまで医療行為を行うことはほとんどなかった。

【結論】
・本人の意思を尊重し医療行為を行わなかったがＡ氏は自然な最期を迎えることができた。
・本人の意思に沿ったケアを行うことで、Ａ氏の部屋は最期までＡ氏らしさの残る部屋であり、最期まで自分らしく生きることができた。

【まとめ】
・意思表示が出来るできないに関わらず、人生の最期を迎えようとしている利用者に対しては、「その人だったらどういうことを望むだろうか」と考えケアしていくことが自分らしく生きるサポートとなる。